

「一日で、二十万円……」

手の中のスマートフォンに表示された非現実的な数字を、僕は食い入るように見つめた。借金という重圧で息も絶え絶えな僕にとって、それは救いの糸であると同時に、一度足を踏み入れたら戻れない深淵への招待状のようにも見えた。

（本当に……ここなんだよね？）

地図アプリが指し示す場所には、都会の死角にひっそりと佇む、無機質なコンクリートの要塞が佇んでいた。看板ひとつなく、外界との接触を頑なに拒絶するような、冷え切った建物。

（……間違いない。でも、本当に入って大丈夫なのかな……？）

鉄錆の匂いと冷気が混じり合う重苦しい空気を吸い込み、僕は建物を見上げた。ネットで見つけた『

短期撮影モデル』の募集。提示された条件は破格すぎて、かえって背筋が凍る。けれど、今の僕に拒否権なんて贅沢な選択肢は残されていなかった。

（……やるしかない。ただの撮影だ。すべてはお金のためなんだから）

自分に言い聞かせ、震える指で冷たいインターホンを押した。ジィ、という耳障りなノイズの後、鼓膜を直接愛撫するような、低くて温度のない男の声が降ってくる。

「あ、あの、本日伺いました、怜貴です……」

「そのまま中に入って来い」

「え、で、でも」

「いいから早く」

「は、はい！」

言われた通り重い鉄の扉を押し開けると、そこは外界の湿り気を徹底的に排除した、乾燥した静寂が

支配する空間だった。高い天井と、床を複雑に這い回る黒いケーブル。その奥で、巨大なモニターの光に照らされた一人の男が、冷徹な横顔を見せて立っていた。

「失礼します……。モデルの件で、伺いました」

僕の細い声が、広すぎるスタジオに空虚に反響する。男がゆっくりと椅子を回転させ、僕を正面から捉えた。

(……っ、あ……)

あまりの衝撃に、指先まで硬直した。

そこにいたのは、今まで見てきた誰よりも、完成されすぎた美貌を持つ男だった。

白く滑らかな肌に、影を落とす長い睫毛。すっと通った鼻筋に、薄く引き結ばれた唇には一切の温度がない。左右対称に整いすぎた顔立ちは、人間というよりも、精密な彫刻のようだった。その無機質な

なんてことない顔をしていた。

「お前の肌の質感を確かめているだけだ」

「そ、それは……っ、でも……っ」

「動くな。……ほう、吸い付くような、いい肌だ」

崇馬さんの指先が、ズボンの裾から覗く僕の生足を、這い回る蛇のようにゆっくりと撫で回し始めた。

さわさわ♡ さわさわさわ♡

「んっ、あ……、崇馬さん……っ……」

（やだ……っ。崇馬さんの手が……。モデルの確認って、こんなところまで触るの……？）

「……透明度の高い、稀に見る極上の素材だ。染め甲斐がありそうだな」

「あ、の……っ、恥ずかしいです……っ！♡ ひゃっ……！♡」

節くれだった大きな手のひらが、膝の裏から太ももの付け根へと、すすす、と滑り込んでいく。指が

「お前、カントボーイで間違いないな？」

「は、はい……間違い、ありません」

一日で二十万円という、普通のモデルでは考えられないような破格の報酬。

その理由は、恐らく募集条件にある『カントボーイであること』だからだと思っていた。総人口の五パーセントである僕のようなカントボーイは、まだまだ珍しいからだろう。

それで二十万も稼ぐことができるのであれば、この中途半端な身体も役に立つものだ。

「……葛城崇馬（かつらぎしゅうま）だ。名前は？」

「あ、久瀬怜貴（くぜさとき）と言います……！」

「そうか。では怜貴。早速確認をさせてもらう」

「か、確認……ですか？」

「そうだ。お前が俺の被写体にふさわしいか。お前が俺の作品の一部として機能するか、この手で確かめる」

「え……」

（そ、それって、もし確認してダメだったら、二十万はもらえないってことだよな……？）

それは困る。なんとかして、いいと言ってもらわないと。

そう思っていると、崇馬さんが椅子から立ち上がり、僕の近くまで歩み寄ってきた。高い身長が僕の上に巨大な影を落とす。スタジオの冷氣の中で、彼から香水の匂いが漂ってきた。

「そこに座れ」

指し示されたのは、スタジオの中央に置かれた、無機質な黒い高椅子だった。僕は震える足で、言われるままにそこへ腰を下ろした。

「し、失礼します……」

（返されたら終わりだ。なんとしても、この人に認められないと……！）

崇馬さんは僕の目の前に立ち、鋭い瞳で僕をじっと眺めた。

「緊張しているな。肩に力が入りすぎている。……だが、その怯えた表情自体は悪くない。恐怖に支配され、粟立つ肌は、光を複雑に散らすのも絵になるだろう」

「え、ええと。すみません……。被写体になるのは、初めてのことなので……」

「その容姿でか？」

「はい……？」

「いや、いい。……お前はただ、俺の指示に従っている」

その時、僕の顔を観察していた崇馬さんの大きな手が、迷いなく僕の太ももに伸びてきた。

「えっ……！？ あ、崇馬さん……っ」

驚いて身体を強張らせ、崇馬さんを見ると、彼は

なんてことない顔をしていた。

「お前の肌の質感を確かめているだけだ」

「そ、それは……っ、でも……っ」

「動くな。……ほう、吸い付くような、いい肌だ」

崇馬さんの指先が、ズボンの裾から覗く僕の生足を、這い回る蛇のようにゆっくりと撫で回し始めた。

さわさわ♡ さわさわさわ♡

「んっ、あ……、崇馬さん……っ……」

（やだ……っ。崇馬さんの手が……。モデルの確認って、こんなところまで触るの……？）

「……透明度の高い、稀に見る極上の素材だ。染め甲斐がありそうだな」

「あ、の……っ、恥ずかしいです……っ！♡ ひゃっ……！♡」

節くれだった大きな手のひらが、膝の裏から太ももの付け根へと、すすす、と滑り込んでいく。指が

触れるたび、じわじわと熱い快感が全身に伝染していくのがわかる。そのまま指先が太ももの内側、最も敏感な場所へと向かった。

（どうしよう……崇馬さんの指が、どんどん上の方に……。このままだと、おまんこに触れられちゃう……っ♡）

「今の声はいいな。もっと聴かせろ」

「あ、……っ、ん、あ……っ♡崇馬さん……っ♡」

「もう熱くなってきたようだな。被写体になるのは初めてでも、こうして触られるのは慣れているのか？」

「そ、そんなこと、ありません！」

「……それが本当なら、お前は感度がいいようだな」

崇馬さんの低い声が鼓膜を震わせ、身体がカァァと赤くなった。

指先が、下着の布越しに僕の割れ目の境界を、掠めるようにして、太ももの付け根を何度も、何度も往復する。

「んうう！♡ あ、そこ、は……だめです……っ！
♡」

（崇馬さんの指が、もう、おまんこのすぐそこを触
ってる……！）

崇馬さんは一切の躊躇なく、僕の下着の隙間に指
を滑り込ませた。そして、熱い指先が直接、僕のお
まんこに触れる。

「ひゃんっ！？♡ あ、だめ、そこは……っ！ 崇馬
さんっ……♡」

「は。もう、濡れているのか。やっぱり随分慣れて
いるようだ。……けれどお前には、『被写体』とし
ての才能があるな」

「んあっ♡ ち、ちが……っ」

（慣れてるって、他の人にこんな風に触られたこと
なんてない！ それに、崇馬さんがおまんこを触っ
てくるから、なのに……っ！♡）

「ここがもう、こんなに熱を持っている。隠そうと
しても、身体は嘘をつけないな」